

6. 人間科学部

【 到達目標 】

本学部の教育目標は、人間をこころ・身体・社会という3つの側面から多角的・総合的に理解することで、複雑化する社会の諸問題に取組み、社会に貢献できる人材を育成することにある。それぞれの側面に関心を持つ多様な学生を受け入れるために、学生の選抜方法として、一般入試以外に加えさまざまな種類の推薦入試を導入する。その際に、一般入試と推薦入試による選抜の比率に十分留意をする。さらに、学部の教育目標に適った教育を実現するために、教員定数及び教育環境に見合った学生定員及びコース間の学生数のバランスを確保することに努める。

【 現状説明 】

学生の募集は、本学の他のすべての学部と同様に入試センターを通して行っている。周知の方法としては大学の公式ホームページ、『キャンパスガイドブック』、「JINDAI Style」、進学懇談会などがある。それ以外の本学部独自の方法としては、附属高等学校を含む指定校に送付している「人間科学部パンフレット」がある。

本学部は「こころ」、「からだ」、「社会」という多様な視点から人間について総合的に理解しようとする学際的な性格を有しているため、具体的には6つの履修モデルを設定しており、多様な学生を受け入れることを目標としている。そのための方法として一般入試のような主に学力を重視した選抜方法以外に、さまざまな推薦入試を行っている。一般入試には本学の標準的な3科目入試であるA方式（前期・後期）、大学入試センター試験と本学入試を組み合わせたC方式（前期）、大学入試センター試験利用（本学部は前期のみ）、給費生試験を採用している。推薦入試には、指定校制推薦（附属高等学校推薦を含む）、公募制推薦（スポーツ・音楽推薦）、公募制推薦（出願部門別）、外国高等学校在学経験者（帰国生徒等）、外国人留学生、社会人入学試験がある。

指定校制（附属高等学校を含む）推薦入学試験は、「神奈川大学への入学を強く希望し、将来性のある勉学意欲に富んだ人物を、学校長の推薦に基づき選考のうえ入学を許可」という趣旨のもとに行っている。従って勉学意欲に富んだ優れた学生を、高等学校長の責任ある推薦のもとに、安定して確保するねらいがある。これは多様な学生を確保するという本学部の教育目標にも一致している。

公募制推薦（スポーツ・音楽）入学試験の場合には、さらに学業以外の側面も重視した選抜方法であり、「高等学校において音楽、芸術、スポーツほか学業以外に優れた実績を上げ、（中略）入学後も学業と課外活動とを両立させる強い意志を持つ者を、学校長の推薦」のもとに確保するという趣旨で実施している。

公募制推薦（自己推薦・部門別）入学試験は、必ずしも学校長の推薦を必要としない点が特徴である。それだけ自立性の高い、意欲ある学生を確保することが期待される。スポーツや社会活動は人間科学部において特に力を入れている部門であり（スポーツ健康コース・人間社会コースがある）、多様な学生を確保するという意味でも適切な選抜方法である。

推薦入試による合格者は、指定校制推薦（附属高等学校を含む）が78人、公募制推薦（スポーツ・音楽）47人、公募制推薦（部門別）23人、外国高等学校在籍経験者1人、外国人留学生2人の計151人である（2008年度）。従って本学部入学定員に占める割合はほぼ50%である。

このような方法に加え、科目等履修生や編入学、転部転科なども行われており、編入学生は2007年度2名、2008年度3名であった。転科・転部学生は、2007年度5名の志願者があり、5名全員合格であった。内訳は経済学科から2名、英語英文学科から1名、応用化学科から1

名、物質生命化学科から1名であった。

本学部の理念や目的は、大学の広報や学部のホームページなどを利用して周知しているが、それを理解した学生を受け入れることを目的としている。そのために、各種の推薦入試では志願理由を文書で求めることで、学部の教育目標との整合性を図っている。また、公募制自己推薦では、「社会活動部門」、「資格部門」、「スポーツ部門」という3つの部門を設けており、本学部のコースとの関係性を重視している。

入学者選抜試験の実施体制は、一般入試については本学の他のすべての学部と同様に入試センターが統括する全学的な入学試験の作問、採点及び入学試験実施体制のもとで行われている。各種推薦入試については、毎年作問委員及び面接委員を選出して行っている。それぞれの委員は原則として毎年交代し、特定の人物に固定されないように配慮している。

合格判定は一般入試及び推薦入試ともに、入試センター職員の立会いの下、教授会構成員全員で行っている。入学者の選抜基準は、一般入試においては総得点順となっており、それを遵守している。また各種推薦入試においては、その出願資格等は募集要項に明記されており、その確認は入試センターが行っている。

入学者選抜の公正性・妥当性を確保するシステムは、一般入試においては、全学的な作問委員による問題及び大学入試センター試験問題を採用し、各種推薦入試においては、作問委員及び面接委員は原則毎年交代し、ある特定の出題者及び面接員に偏らないようにされている。各年の入試問題の検証に関しては、教授会構成員全員が関わる合格判定の会議において、入試問題の内容について確認され、問題の適切性や難易度について検証されている。また、作問担当となった教員は、過去の入試問題を検討し、判定会議での議論なども勘案して、作問を行っている。

推薦入学における、高等学校との関係については、指定校（附属高等学校を含む）の選定にあたっては、毎年入試センターと学部選出の複数の入試管理委員が指定校推薦入学者の大学での単位取得状況などを考慮しながら行っている。さらに、高校生に対する進路相談では、毎年全学部から選出された入試管理委員が横浜及び地方において進学懇談会を開催している。また指定校（附属高等学校を含む）に対しては訪問し、当該高等学校から進学した学生の成績等の学生生活について報告するとともに、大学及び学部の説明等を行っている。また同時に各種推薦入試についての情報を伝えている。

本学部の1学年の定員は300人である。それに対して在籍学生数は2008年7月16日現在で、3年次が340（341）名、2年次が343（339）名、1年次が312（311）名の計995名である（カッコ内は入学時点での数、大学基準協会基礎データ 表14）。3年次までの総収容定員900人に対する在籍学生の比率は約1.11倍となる。また3年次までの総入学定員に対する入学者数の比率の平均は1.10である。本学部の3年次における総収容定員900名に対する在籍学生数は997名の比率は1.11倍であり、著しい超過定員とは言えない。また年次の進行に伴って、入学者は定員の1.0倍に近づいている。

本学部の退学者は、2006年度の学部開設以来10名（2006年度5名、2007年度5名：大学基準協会基礎データ 表17）であり、他学部に比べて少ない。退学の理由は、他校への入学が6名（60%）を占める。退学希望者に対しては、学部長や学生生活支援委員などが面接を行い、退学を希望するに至った背景などを質問し、状況を変える可能性はないか、指導している。

【点検・評価】

本学部は心理発達、スポーツ健康、人間社会の3コースからなっている。この学際的な性格上、多様な興味・関心を有する学生を受け入れることを目標としている。そのための方法として一般入試のような主に学力を重視した選抜方法以外に、音楽、スポーツ、資格、

社会活動等学力以外の側面を重視した選抜方法を併用している。特に公募制推薦入学の主な応募部門である音楽、スポーツ、資格、社会活動はそれぞれのコースの背景となっているところ・からだ・社会の各側面に対応しており、その教育目標にふさわしい部門と言える。本学部のカリキュラムも3コースの特色を生かした構成になっており、学力を重視する一般入試と学力以外のさまざまな側面を重視した各種推薦入試がほぼ半々の割合で存在するのはカリキュラム遂行上適切であり、学部の教育目標に適っている。

本学部では、学科全体で募集し、入学してからコース分けしているが、これは、大学に入ってから学修で自己の適性や将来の目標を考慮した上での選択を可能とし、学生の動機付けの上でも良い効果を持つと考えている。コース間の学生のバランスについては、初年度の2006年度、2007年度及び2008年度と年度を経るに従いコース間の差が解消されてきている。

入学者選抜の仕組みに関しては、すべての入学試験に入試センターと学部の委員が関わって行うので非常に透明性が高い。また各種推薦入試については、原則毎年作問委員及び面接委員を交代しており、出題者は特定の人物に固定されない。また合格判定は一般入試及び推薦入試ともに、入試センター職員の立会いの下、教授会構成員全員で行っている点も非常に透明性の高い仕組みと言える。

入学者選抜基準は、一般入試においては総得点順となっており、極めて透明性が高い。また各種推薦入試においては、その出願資格等は募集要項に明記されており、その確認は入試センターが行っている。上述したように、合格判定はすべての入試において、教授会構成員全員による受験者の成績閲覧の上、行っている。そのため合格判定に疑惑が入り込む余地はない。ただ問題点として、公募制推薦（部門別）において、3つの部門（社会活動等、資格、スポーツ）間のレベルの調整が難しいことが挙げられる。

入学者選抜の公正性・妥当性を確保するシステムについては、一般入試においては、全学的な作問委員による問題及び大学入試センター試験問題を採用し、各種推薦入試においては、作問委員及び面接委員は原則毎年交代し、ある特定の出題者及び面接員に偏らないようにされている。合格判定は教授会構成員全員による、全受験者の成績閲覧の上客観的に行っている。それゆえ結果の公正性・妥当性は十分に確保されている。

入試問題を検証する仕組みは、一般入試においては、全学的な作問委員会が検証を行っている。各種推薦入試の問題については、現在のところ問題そのものを検証する仕組みは持ち合わせていない。但し、合格判定の場に全教員が参加し、問題内容について確認するなど、実質的なチェック機能は働いている。編入学試験では、英語問題と小論文を2人で作成し、互いに問題内容が確認できるようになっている。特に問題はないと考える。

推薦入学における、高等学校との関係については、指定校（附属高等学校を含む）の選定は、毎年入試センターと学部選出の複数の入試管理委員が協力して行っている。その際高等学校ランキング、本学への入学者の過去の実績、当該校出身の在学生の成績等をデータとして参照しているため、その選定の妥当性・客観性については問題ない。

高校生に対する情報伝達は、進学懇談会や指定校（附属高等学校を含む）訪問を通じて、大学及び学部の説明や各種推薦入試についての情報を伝えている。また、本学部独自の方法として「人間科学部パンフレット」を指定校に送付し、情報の伝達に努めている。このように、高校生に対する進路相談・指導、その他の情報伝達については適正に行っていると考える。

但し、推薦で入学した者の中には、特に、公募制（スポーツ・音楽）で入学しケガをした場合などで、少数ではあるが講義へのモチベーションが低いために大学生活の継続が困難になる場合すらある。推薦入試の条件のみを見ていて、本学部での学修内容など分からぬまま入学している者もいるのではないかと思われる。情報伝達に一層力を入れる必要が

あろう。

外国人留学生の受け入れについては、国際化の進展への対応上、その増加を考える必要がある。

学生収容定員と在籍学生数、(編)入学定員と(編)入学者数の比率は、上で記したように、3年次までの学生収容定員に対する在籍学生数の比率は1.11倍である。この比率は、入試における「歩留まり」の不確実性を考えると許容範囲と言えよう。2008年度は、300人の入学定員に対して入学者数は312人で入学定員に近づいており、適切である。

本学部では退学者が10名と非常に少ない。少人数教育や学生生活支援委員による面接指導などの取組みを継続していく必要がある。

【改善方策】

本学部では、大学全体の入試制度の枠組みの中で学生を受け入れており、大幅な改善を必要とする点は見当たらない。しかし、今後の検討課題として以下の点がある。

人間科学科は3コース制をとっているが、コース間の学生数に開きがある。コースを選択するのは2年次であるので、入学者選抜の段階に問題があるわけではないが、受験生に対する広報の充実などを通して、3つのコースの存在をより強くアピールし、より学部の目的に合致した学生の受け入れを目指す必要がある。学生収容定員と在籍学生数の比率の適切性については、入試センターと協力しながら、できるだけ定員の厳守を実現していく必要がある。また、退学者数が少ない現状を維持するために、退学希望者に対する指導などを今後も継続する。

推薦入試における高等学校との連携については、高等学校に対して本学部の内容をさらに詳細に伝えるなど、高等学校との連携をより強化する必要がある。それを通じて、推薦入試で入学した学生のモチベーションの問題なども改善を図る。外国人留学生については、より多く受け入れるために、積極的に広報活動・情報提供を行う。同時に、留学生の本国地での大学教育及び大学前教育の内容・質については必ずしも把握しているわけではないので、今後はデータを参照の上、正確に把握するように努める。